

令和5年度「外国人留学生のための能楽体験・鑑賞教室」を実施しました

1. 日 時： 令和6年1月19日(木) 17:00 ~ 20:45
2. 内 容： (1)能楽体験
(2)「能楽堂ショーケース」鑑賞
演目：狂言「梟山伏」 能「巴」
※日本語、英語の字幕表示あり
3. 会 場： 国立能楽堂
4. 参 加 者： 24名(アメリカ、アイルランド、イタリア、ウズベキスタン、オーストリア、オーストラリア、オランダ、カザフスタン、シンガポール、スペイン、タイ、中国、デンマーク、バングラデシュ、フランス、フィンランド、ブータン、ブラジル、ブルガリア、ベトナム、ペルー、ミャンマー、モンゴル、ルーマニア 各1名)

5. 実施状況：

外国人留学生に日本固有の伝統文化を体験する機会を提供することで、日本文化に対する理解の深化を図るため、国立能楽堂において能楽体験と「国立能楽堂ショーケース」の鑑賞をあわせた「外国人留学生のための能楽体験・鑑賞教室」を実施、外国人留学生24か国籍24名を引率しました。

まずは稽古場において能楽体験として謡の体験と動きの体験。講師は女性能楽師の伶以野陽子氏が務めてくださいました。謡は先生が外国人留学生向けに作ってくださった原稿を全員で読み合わせました。参加者は能楽特有のリズムと抑揚に苦戦しながらも、先生のご指導のとおりうたうことができました。次に動きの体験として、橋掛りから登場、面をつけて本舞台上で摺り足をして左右を見渡すという動作をしました。最後に参加者全員で舞台上に並んで写真撮影をしました。

次に、劇場に移動をして、「国立能楽堂ショーケース」を鑑賞。解説を聞いた後に狂言「梟山伏」、能「巴」を鑑賞しました。「梟山伏」は、とある兄弟の弟が、山から戻ってくるとどうも様子がおかしく、兄は色々と治療をしますが、中々効果がありません。そこで、山伏のもとを訪ねて、弟の容体を診てもらおう頼むが……。という話。「巴」は源義仲の墓前に現れた巴御前の霊が、旅の僧に主君の義仲と最期を共に出来なかった恨みが執心に残っていると訴え、義仲との合戦の日々や、義仲の最期と自らの身の振り方を説明したのち、執心を弔うよう僧に願って去って行くという話でした。留学生に感想を尋ねると「言葉が難しい」「よくわからなかったけれど、動きを楽しめた」というような感想がありました。最後に、能舞台の前で写真撮影をして解散。

参加者アンケートでは、能楽体験がとても好評で「とてもよかった」「よかった」の回答が10割という結果となり、参加者が満足した様子がうかがえました。体験を伴うことで、鑑賞の理解がより深まったかと思われます。

6. 参加者の感想

- ・特によかった点は能面をつけたり、セリフの発声をしたことです。この体験があったおかげで、劇中の謡が理解できました。
- ・稽古場の能舞台の舞台裏に行けたことと能面をつけられたことは、他では得られない経験だったと思います。
- ・国立能楽堂で狂言と能が見られたのは良い経験だった。演劇はもちろんのこと、能楽堂自体も素晴らしい。
- ・翻訳とパンフレットがあったおかげで内容をよく理解することができた。
- ・日本人は翻訳機なしで理解できるのか不思議に思った。
- ・巴は女性だが男性が演じていた。体験の講師の方は女性だったが、彼女のような女性能楽師は他にいるのだろうか？歌舞伎は男性しか演じられないと聞いたが、能楽は女性が演じることはあるのだろうか？
- ・能楽は学校で触れる機会がなく外国人留学生には、めったにない機会なのでこのイベントを続けたほうがよいと思う。

7. 能楽体験の様子











以上